



三重テレビ放送 長江正社長 インタビュー

長江 正（ながえ ただし）
1958（昭和33）年3月生。早稲田大学教育学部卒、81年東海テレビ放送入社、同社報道部長、経営戦略室長、技術局長などを経て2014年6月に三重テレビ放送常務取締役、15年6月から代表取締役社長。

開局50年、独自制作に地元三重への愛と尊敬をこめて 伊勢神宮、熊野古道、宝刀……コンテンツ提供局を目指す

とし、開局50周年を迎えた三重テレビ放送。伊勢神宮や熊野古道などの歴史遺産に恵まれた地の利を生かし、長江正社長は「放送局からコンテンツ提供局」へとウイング拡大を目指す。その心は地元への「愛と尊敬」だ。（聞き手は塚本隆・中部財界フォーラム社社長）

——今年、開局50周年を迎えられました。おめでとうございます。

長江 ちょうど新しい御世となる時代の節目と重なり、全局員一同、次の半世紀に向けて県民の皆様にご貢献できる地元局としての使命感に燃えています。この5月25日には開局50周年特別番組として「お伊勢参り」（1時間番組10本シリーズの第1話）をオンエアしたばかりです。昨年、夏の甲子園第100回大会を記念して放送した「HEROES—あの夏、僕は白球を追いかけた」の続編として「HEROES 2」も特番として放送しました。4月には大相撲津場所も開局記念として主催しました。年末にかけ他にも記念事業を計画、ご期待ください。

——放送局としてのコンセプトをご教示ください。

長江 県内に本社のある放送局として県民に支持されないとその存在価値はありません。報道機関として災害への対応にも一生懸命取り組んでいます。もしもの時には媒体力を生かし県民の皆様のご生命財産を守ることにお役に立つというのが大きな使命。また、地域のさまざまな動きを丁寧にすくい上げ、いろんな番組を作るのは三重テレビの役割だと認識しています。今後は、対外的なブランド力強化にもっと力を入れたい。すでに自社制作番組をBSで放送してもらっており、「良質な番組」として少しずつ評価をいただいています。

——伊勢神宮、熊野古道をテーマに三重なら

ではのドキュメンタリーを制作されていますね。

長江 キー局のコントロールを受けない独立局なので、営業面では苦しいことも多いのですが、半面、自社制作として番組を自由に作って販売できますし、自主編成もできる。それを強みとして汗を流しています。1時間のノンフィクション番組を年間10本作るシリーズを毎年続けています。これまでの7シリーズはすべて好評でした。

——最近では「宝刀（たからのかたな）～日本人の魂と技」も素晴らしい番組でした。

長江 ありがとうございます。俳優の松平健さんにご出演いただき、有名な声優の羽佐間道夫さんにナレーションを担当していただきました。刀剣女子がブームといわれますが、刀剣そのものに関心を抱く方々が実に多く、造詣の深い経営者もたくさんおられます。それで本格的に番組づくりに取り組みました。しかし、現場スタッフの苦労は並大抵ではありません。簡単に取材は許されず、私どもの「本気度、誠実度」が試されました。東京の刀剣博物館（日本美術刀剣保存協会）をはじめ伊勢神宮、徳川美術館、熱田神宮はもとより鹿島神宮や出雲、岡山など全国各地のたくさんの刀剣関係者の方々との信頼関係を構築しながら番組作りを進めていきました。

——エピソードはございますか。

長江 番組の題字「宝刀」の書は、ダウン症の天才書家といわれる金澤祥子さんにお願いしました。作品は東京・墨田区の刀剣博物館に寄贈しました。素晴らしい書ですよ。

——放送施設の改善にも取り組まれていますね。

長江 施設の更新時期でもあったのですが、完全な「IPサブ」を国内の放送局では初めて導入しました。専門的になりますが、一つのサブで複数のスタジオを制御する効率的な運用ができます。また、中継車を使わずに本社からの

リモートコントロールで中継が可能です。もちろん4Kへの対応もできています。

——改めて、テレビの魅力について語ってください。

長江 戦後の昭和時代はテレビ抜きに語れません。高度経済成長とともにテレビが躍動した時代ですね。平成に移って、たとえば災害の生放送など、生中継の報道にテレビの力、役割を果たしてきましたが、平成後期には、インターネットの時代となり、テレビのメディアパワーが問われるようになったのは事実です。しかし、テレビには人々の共感感動を生む力があります。その魅力は変わっていないと思います。

——三重テレビの将来についてはどうお考えですか。

長江 テレビは、明治維新に匹敵する時代の激変の真ただ中にあるという認識です。それはネットなど「情報の出口」が増えたからです。今や競争相手は同業者ではなくガリバー的な動画配信事業者や通信事業者など異業種になってきています。いままでの成功体験では乗り越えていけない時代に入っています。そこで、私は「ブロードキャスティング・ステーション（放送局）からコンテンツ・ステーション」への変革ということを言っています。独立局ですから、系列ネットワークに左右されずに自由に番組作りができる。これは強みだと思います。だから地域密着の番組も制作・放送出来るわけです。また最近では放送外コンテンツとしてインターネット中継にもチャレンジしていてスポーツ大会などをインターネット中継すると、アクセスがけっこうすごいんですよ。大会の関係者や参加者のみなさんにもとても喜んでもらっています。もちろん4K番組を自社制作してBS局に番組購入していただくことで4K番組の実績を重ねています。このように、単に番組を放送するだけではなく、コンテンツをさまざまな「出口」に供給するステーション＝局として新たな時代を切り拓いていきたいと考えています。